



喫茶の起源と茶の流通に関する一考察

田 中 美 佐

要約 この論文では、喫茶文化を体系化する一環として、喫茶に関する4つのそれぞれ緩やかに関連しあう事項について考察するものである。まず茶樹の利用が見られたと考えられる照葉樹林文化に関する論の紹介を行い、その文化的基盤に関しての考察を行った。続いて喫茶を生み出した民族に関する考察を行い、さらに漢代における地域的な茶の流通例に関して、中国最古の喫茶関連文献からの考察をおこなった。最後に、唐代の茶人である陸羽をかたどった陸羽人形と仏教行事である灌仏会との関連を考察した。

キーワード 茶, 照葉樹林, 文化, 流通, 陸羽, 人形

原稿受理日 2009年6月2日

Abstract This paper examines four separate but possibly related accounts of tea-drinking culture. First, I look at studies of an evergreen broad-leaved forest culture, which is thought to have used tea plants for the first time in history. Second, I consider peoples who are thought to have invented tea-drinking. Third, I discuss an example of regional distribution of tea in the Han Dynasty, by referring to a text of that period entitled *Tong yue* (「僮約」). Finally, the paper speculates on the relationship between the Lu yu (陸羽) doll, which was modeled and named after a famous tea master in the Tang Dynasty, and a Buddhist festival called *Guan Fo Hui* (灌仏会).

Key words tea, evergreen broad-leaved forest, culture, distribution, Lu yu, doll

はじめに

茶は、現在日常飲料として人々の生活にとけ込んでいる。ことにアジアではこの葉を常用する地域が多い。茶の飲用方・種類・製法は、時代・地域の嗜好・必要性などに応じてさまざまである。その飲用法について述べれば、中国の喫茶方法としては、高橋忠彦氏は、唐代は、固形茶を粉末化し、釜に沸かした湯に粉の茶を投じ、味の出た湯を汲み出して飲む煎茶法が完成し、宋代は、固形茶・散茶を粉末化し、茶碗（盞）に粉末の茶を入れ、上から湯を注ぎ、かき回して飲む点茶法が盛行し、そして明代は、散茶で、茶葉に直に湯をかけ、味を出して飲み、茶壺（急須）を使用することもある泡茶法がみられ、それは明清以降現代まで普及しているとし、主要な三種の飲用法の典型をあげる^①。それらは、わが国にも順次時を経て入ってきたと考えられる。現在、その種類も日本・中国の緑茶は不発酵茶であり、中国・インド・スリランカの紅茶・中国のウーロン茶などは発酵茶の系統である。また製法も、蒸煮・釜入り・発酵によるものがあり、形状も蒸して搗きかためた餅茶・散茶葉等々、さまざまである。また茶葉に香りづけする場合もあり、華北で好まれる花茶は、ジャスミンなどで茶葉に香りをつけたものである。さらに飲用に際して茶葉以外のものを混ぜ入れる場合もある。例えば、湖南省の擂茶などは、茶葉の他にも生ショウガ・生米・炒ったゴマ・炒ったダイズ・塩を入れるし、チベットの酥油茶は、塩・バター・オイルを混ぜ入れる。そして茶葉を食する場合もあり、例えばタイ北部でみられるミエンは、漬け込んで発酵させたものを口で噛む。

本稿では、茶樹の利用がみられたと考えられる照葉樹林文化に関する論の紹介をおこないつつ、その文化的基盤に関する考察や喫茶を生み出した民族に関する考察を行い、また漢代の茶の地域的流通状況を推測させる文献や商家において茶の利益を祈願した逸話などの考察も交えながら、現在、私が関心を持っている喫茶における文化的背景について論じてみたい。

1. 照葉樹林のめぐみ

茶は、元来、照葉樹林帯の産物であるといわれる。照葉樹林帯は、広大な常緑広葉樹の樹林帯で、主としてアジアにみられ、ネパール・ブータン、インドのヒマラヤの中腹・アッサム地方、インドシナ半島北部、中国の雲南・四川周辺から長江流域の中国南部、さ

らには日本の九州・中国・近畿・東海・北陸の沿岸部・関東・東北地方沿岸部に続いている。その研究は文化論としては、後述する中尾佐助氏の提唱された照葉樹林文化論がつとに有名で、まず、茶の歴史を考える際、照葉樹林帯とその文化から論じられることがおおい。

照葉樹林とは、温暖帯にある常緑広葉樹で、葉の表面のクチクラ層が発達しており、光沢があり雨をはじくカシ・シイ・クスノキ・サカキなどで、ツバキ科の茶樹もふくまれ、日本ではなじみのある樹木である。森林生態学の山本進一氏の照葉樹林に関する解説が詳しいので、以下引用してみたい。氏は、照葉樹帯の出現地域や照葉樹とよばれる由来については、“熱帯から亜熱帯、温暖帯にかけての気候帯の湿潤地域には常緑で広い葉をもつ常緑広葉樹林が出現する。熱帯から亜熱帯の常緑広葉樹が一般に大型で薄い葉をもつものに対して、温暖帯の常緑広葉樹は、小型で厚い葉をもつとともに葉の表面のロウ質のクチクラ層が発達し陽光をうけるとテカテカと光ることから照葉樹とよばれており、照葉樹の葉のこのような形態の特徴は冬の寒さに対する適応のひとつと考えられる。”⁽²⁾ といい、気候区分と分布地域などの関連については、氏は、“照葉樹林は主に東アジアの、夏は温暖多湿となる夏雨型の温暖帯湿潤地域に出現するが、他地域でも類似の気候条件下では照葉樹林が出現する。”⁽³⁾、また、“わが国の照葉樹林は九州南部から東北地方の沿岸部まで分布しており、暖かさの指数で八五—一八〇度・月の範囲にあたる。”⁽⁴⁾ といい、照葉樹林を構成する樹木については、“照葉樹林を構成する主要な樹木については、ブナ科のシイやカシ類、クスノキ科のタブノキ、ツバキ科のヤブツバキやサカキなどであるが、地域や場所によって出現する樹木は異なる。このなかでヤブツバキはもっとも冬の寒さに耐えることができ青森県にまで分布していることから、照葉樹林を代表する樹木と考えてよいであろう。”⁽⁵⁾ という。

さて、中尾佐助氏は、先に述べたように照葉樹林文化論を提唱した。この概念は事実上『農耕の起源』において、最初に発表されたが、上山春平氏が司会し、中尾佐助氏・佐々木高明氏はじめ諸氏が参加した『続・照葉樹林文化論』の討論なかで従来の照葉樹林文化論の考え方に大幅な修正・追加がおこなわれ、体系の形がいちおう整えられた⁽⁶⁾。この討論の参加者である民族学者の佐々木高明氏は、この討論を回顧し、その要点をあげるが、この討論により、従来からの照葉樹林文化を構成する文化要素のなかに新たなものが付加され、さらに照葉樹林文化の構成要素と考えられるものの存在することが確認され、また「東亜半月弧」という照葉樹林文化センターが仮に設定された。氏は次のように述べている。

(三) 照葉樹林文化を構成する文化要素として従来指摘されていた、水さらし、茶、絹、ウルシ、麴酒、柑橘とシソなどのほか、新たに、納豆のようなダイズの発酵食品やコンニャク、あるいはハンギング・ウォールや鶺鴒などの諸要素が加えられ、さらに歌垣や十五夜とイモ祭りの習俗、焼畑の開始期に行われる儀礼的狩猟の慣行、山ノ神をめぐる信仰やオオゲツヒメ型の死体化生神話その他、習俗や神話などに関する諸要素についても照葉樹林帯に広く分布し、照葉樹林文化の構成要素と考えられるものの存在することが確認された。

(四) さらに『続・照葉樹林』の討論で、特筆すべき事は、右に述べた照葉樹林文化の諸要素の分布を重ね合わせ、照葉樹林文化のセンターを仮に設定したことである。雲南高地を中心に西はインドのアッサムから東は中国の湖南省に至る半月形の地域を、西アジアの「肥沃な半月地帯」に対して、われわれは「東亜半月弧」と名付けることにした。中尾自身の用語例でいうと、照葉樹林文化の中心にあたるこの地帯は『農耕の起源』ではロロ・センターとよばれていたものが、『照葉樹林文化』のなかでは「雲南省あたりの山岳部」あるいは「雲南センター」という表現にかわり、この討論で「東亜半月弧」という名称に落ち着いたことになる⁽⁷⁾。

中尾佐助氏が照葉樹林文化論を1952年のネパール調査の終わり近くに着想してからはや半世紀が経過する。氏は、大阪府立大学における最終講義において、“眼下の夕闇迫るカトマンズ盆地奥に、黒々とした浮かぶ森を認めた。常緑カシの照葉樹林帯であったが、これが東ヒマラヤに続き、中国南部から日本南部まで続く東アジア温帯の大構造であるという認識に、即座に思い至った。”と述べた⁽⁸⁾という。そして、氏がその照葉樹林帯に共通するさまざまな文化要素にも着目し、精緻に観察したことは、上述の記載内容からも十分にうかがい知ることができよう。氏とともに研究を重ねた佐々木高明氏は、「起源論」や『農耕の起源』以来中尾氏が発表してきた研究は、現在でも有効で、氏の栽培食物の起源と農耕文化の大類型設定に関する学説は、発表後、30年余を経過した今日でも、なお力強い説得力を有し、世界に誇りうる学説として生き続けている⁽⁹⁾という。

本稿の重要項目であるツバキ科の茶樹は、この照葉樹林に生育し、採取され、各種産物同様、占来より利用され、照葉樹林文化に彩りをそえた。また付け加えるなら、茶樹は竹同様、焼畑で火入れをしたあと、さかんに生えてくることも知られている。このことから、焼き畑文化と茶樹とのかかわりも、深いと考えられる。民俗学者の間では遠く雲南省付近の民族の文化が日本文化のルーツのようにいわれるが、それは、この共通の照葉樹林

文化を基盤とするからであろう。

残念なことに、この照葉樹林も減少・消滅している。植物生態学者宮脇昭氏は、次のように述べている。

とくに日本文化の原点ともいわれる照葉樹林帯では、われわれの調査した結果、さらに現存植生図と潜在植生図を比較しても分かるが、残された鎮守の森、屋敷林、斜面林などを含めても、照葉樹林は本来の森の領域である潜在自然植生域のわずか0.06%しか残っていない。原生林ではないが、それに近い自然林では、九州の宮崎県の綾の照葉樹林などにしかない。これが冷厳な事実である⁹⁰。

以上は、わが国の状況であるが、私は、古来より、アジアの温暖な山岳部・平野部を横断し共通の文化を育み続けてきた照葉樹林帯が各地において減少・消滅することによって、長い時間の経過なかでこの樹林帯のめぐみに生まれながら形成された、各種の慣習・儀式をはじめとする幾多の無形有形の文化的事象（そのなかには、もちろん茶をもちいたものも含まれる）が、変容・消滅し、また同時に、そこに住まう人々のアイデンティティーが脆弱化・希薄化してゆくことに拍車がかからないかと危惧している。

2. 喫茶をはじめた民族

従来から、茶の研究では、“喫茶の発生は、少数民族起源であるのか、漢民族起源であるのか。”という論題が、しばしばとりあげられる。これは、雲南省などの照葉樹林帯の地域では茶樹が下ばえとして生育しており、その様な地域には少数民族が多く居住し、また、彼らが食べる茶など、独特の文化を有していることとも関連していると思われる。布目潮風氏は、“喫茶をさも自明のこのように中国西方南方の少数民族起源と考える人は、次の様に考えているようである。茶樹は中国のこの方面の山野に生育している。とくに山中に自生していた。そこに住んでいるのは少数民族である。したがって茶葉の利用を考えたのはこの方面に住んでいる少数民族にちがいないとなるのではなからうか。”⁹¹と述べたうえで、製茶という加工技術の開発がともなわないと、茶葉は飲用には用いられない点、照葉樹林文化の特色としての茶葉の利用を考え、そこに居住する一部の少数民族にみられる嘯み茶あるいは食べるお茶を、飲料としての茶葉の先駆形態と考えることには疑問がある点、少数民族の中の飲食習俗のみが最近喧伝されて、中国根幹の漢民族の飲食史の方は

あまり顧みられていないが、その漢族には、過去三千年に及ぶ膨大な文献が世界史上稀に見るほど蓄積されており、この文献の中から探求される喫茶の歴史を無視することは許されない点など他を論拠として、氏自身は喫茶の少数民族起源説にたいしては、批判的立場をとる⁹²。この“喫茶の発生は、少数民族起源であるのか、漢民族起源であるのか。”という問題について考察する際、歴史的に十分な文献がないことも大きな障害となっている。例えば現在、中国の華中・華南地方に居住するミャオ（苗）族やヤオ（瑶）族のように長年茶樹と接しながらも歴史的には文字をもたない民族も多く、その文献上の探索は、当然漢族などの周辺の他民族の残したものに頼らざるをえない。とすれば必然的に、中国から東南アジアにかけての詳細な民族学的フィールドワークがさきの問題を考察するさいの重要な鍵となろう。松下智氏は、中国各地の茶や少数民族の茶に関する研究を、丹念におこなわれているが、“長い茶の歴史のなかで、ようやく茶の原産地の究明が緒につき始めてきたが、いまもって茶の原産地はすなわち製茶・喫茶、という文化の発生した地方であるとみられている。”⁹³とし、茶の原産地イコール製茶技術・喫茶の発祥地という考えに布目氏同様、疑念を投げられている。氏は次のように述べる。

白生茶樹の分布が、雲南省南部に起点をもって、雲貴高原を北上して「巴」の地で漢文化と接触し、茶の利用が始まったとみるが、その中でも武陵山における「瑶族」が、茶ともっとも深いかわりをもっており、この瑶族の山地資源を漢族が利用することから茶の利用の道が開かれ、漢族によって茶業開発の方策がとられたものとみている。もともと、瑶族の茶の利用は、「搗茶」に始まり、「打油茶」「油茶」と簡便化に向かって現在の形になっていく。この中から茶だけの利用が漢族によって始められ、茶業開発として各種の製茶法が創案され、現在に至っている⁹⁴。

私は、以上の見解は、氏の丹念なフィールドワークにもとづいており、一つの重要な考察としてとらえてゆきたい。ただし、現段階では、簡便で丹念に製茶したとはいえない程度の茶葉をもちいた飲用方なども含め検討するならば、漢民族の茶葉利用以前に、少数民族が喫茶行為をおこなわなかったかどうかという点を十分に証明することはいささかむずかしいかもしれない⁹⁵。結局、この喫茶の発生がどの民族に起源するのかという問題の解明については、新史料の発見、今後の各地の地方誌の整理・研究、さらに中国だけではなく、東南アジア地域もふくめた民族学的なフィールドワークの積み重ねと、茶樹に関する植物学的研究の進展などに委ねるところとなろう。

3. 茶に関する前漢時代の地域的流通についての一例

現在、茶に関する年代の記された初出の文献とされるものは、前漢の名作家王褒が書いた「僮約」という戯文である。王褒は、前漢の宣帝に仕え、字を子淵といい、蜀（四川省）の人である。この文章には神爵3年（西暦紀元前59年）とあり、舞台は王褒の出身地蜀である。蜀（四川省）は、古来より温暖で豊かな土地として知られ、広大な内陸盆地である。長江の上流域で、中尾佐助氏の提唱された東亜半月弧を形成する一地域で照葉樹林帯の中核地域にあたり、茶の生育に好適な地域である。さて「僮約」には、使用人便了の仕事についての記述がみられるが、

家に客があれば、壺をさげて酒を買いに行き、水を汲んで食事をつくり、杯をすすぎ膳をととのえる。畑から蒜を抜き、紫蘇をきり、脯を切り、肉をつき、芋を入れあつものをつくり、魚のなますをつくり、鼈を包み焼きし、茶（茶）を煮るなど、なんでもそろえなければならぬ。……犬を牽き鶯を販売し、武都に茶（茶）を買う。（王褒「僮約」⁶⁶）

とある。まさに当時の生活の一端を知りえる好史料であるが、便了の仕事の内容から判断すると、彼が来客のおりに茶を煮たり、また茶を買い求めに行ったりしていることがわかる。布目潮風氏は、『茶経』八之出および晋の常璩の『華陽国志』から次のように述べる。

中国における茶の生産地の全貌が判明するのは、唐代の八世紀に著作された『茶経』八之出である。そこでは、劍南道として、今の四川省内にある彭州・綿州・蜀州・邛州・雅州・瀘州・眉州・漢州と多くの州名と、その州下の県名を多数挙げている。また晋の常璩の『華陽国志』は、東晋の永和十一年（三五五年）に完成した四川一帯についての現存する中国最古の地誌であるが、その巻三、蜀志、南安県（今の樂山市）の条に、「南安、武陽、皆名茶を出す」とあり、「僮約」に出てくる武陽が、南安と共に名茶の産地であると記されている⁶⁷。

さきに述べたように蜀の地は茶の生産に好適な地域であり、またこの地では唐代以前の喫茶に関する文献史料も実際多く存在することから、この「僮約」の記載もあわせみれば、

茶が前漢時代には、すでにこの地方で生産されていたと考えても間違いではなからう。さて、便了は成都から南方に位置する彭山県にある武陽まで茶を買いに行くが、この便了の住む成都から武陽まで、100km程離れており、便了はかなり遠くまで茶を買い求めに行ったことがわかる。このことから、照葉樹林帯の中核地域であって、当時から茶を生産していたのではないかと考えられる蜀の地方でも、茶の流通は、未発達で茶を常に近隣でまかなえるほどのものではなかったのではないか。また、来客に茶をだすという記述のみであるから強く言及することは避けたいが、当時、茶自体がまだまだ貴重であって、接客用として重宝され、武陽のような遠距離の地域にまで買い求めに行ったのかもしれない。便了は鶯鳥の販売もした家政の担い手であったから、これもあくまで推測の域をでないが、さらにこの茶を成都にもどり、付近で販売した可能性もある。この史料は、戯文とはいえ、当時の喫茶事情が生き生きと描かれている点が、非常に興味深く、大切な史料であろう。

4. 茶の商いと陸羽人形

陸羽(733-804?)は、楚(湖北省)の人で、字は鴻漸、竟陵の龍蓋寺の智積禪師に拾われ寺院で育ったといわれる。陸羽の自伝にみられる人柄は弁舌が達者で、義理堅く、また一方性急で、かつ特異なまでに一徹な部分もあった。任官については、はっきりしないが、当時の文化人と多く交流し、詩文に秀でた僧皎然、初期の填詞作家の一人である張志和、安祿山の乱のとき義勇軍をたて、書家としても名高い顔真卿などとの交わりが知られる。さて、陸羽は中国で初めての茶書である『茶経』を著した。その内容は、茶の起源、製茶の道具、製茶法、喫茶の道具、茶の煮たて方、茶の飲み方、茶の史料、茶の産地、略式の茶、茶の図からなり、当時の茶に関する貴重で豊富な情報が多く含まれているが、その一之源に、次のようにみえる。

茶の効用は、味がこの上なく寒であるから、その飲用は、行いが精れ、儉の徳をもつ人にもっとも適している。(『茶経』卷上 一之源⁸⁸)

陸羽は“儉の徳”をもつ人を理想とし、それを『茶経』の精神的な柱とした。また同書の各所にみえる“精”という文字もこころ、たましい、まじりけがない、純粹、すぐれているなどの意味があって、“儉の徳”とともに同書の重要な精神的な柱といえる。このように『茶経』は、陸羽の精神性も十分に読み取るができることから、記されてから1200年以上

経過した今もなおその輝きを持ち続ける名著であるといえよう。

ところで、陸羽関連の史料は、現存するものは多くはないが、本稿では、その中の一つ『唐国史補』に載る唐代の商家にみられた陸羽に関する興味深い慣習を一つあげたい。

陸羽は文学の才能があった。意欲的で、一つの物事をも極めていないことを恥じて、茶に関する見識がもっとも秀でることとなった。鞏県の陶工の多くは陶磁器の人形をつくった。それを陸鴻漸と名づけ、数十個の茶器を買えば、鴻漸の人形がもらえた。商人は茶の利益があがらないと、この人形に水を注いだ⁹⁹。（『唐国史補』巻中 陸羽得姓氏²¹¹⁰⁰）

『唐国史補』は唐の李肇が著した。玄宗の開元（713-741年）から穆宗の長慶（821-825年）にかけての君臣の言行、逸聞、雑事、選挙、制度の沿革、名産、事物、文風、宴遊、博戯にいたるまでを事実面に即して集めているといわれ、唐代の社会風俗、歴史、文学を知るための貴重な史料がみられるが、その出典は記されていない。さて、上記文中の鞏県は、現在の河南省鞏県より、東方にあったようだ。唐代の窯址も発見されており、白磁を主体に黒磁と三彩陶器を焼造していたことが確認されている¹⁰¹。この逸話が、陸羽の生存していたころのものか、あるいは没後のものかは定かではないが、陸羽の没後年からあまり距たりのない時期の著述なので、当時から陸羽の茶人としての名声が高かったことが十分に読み取れよう。また、陸羽の生存時期、そして『唐国史補』が記された時期ともなれば、北方でも茶は流通し、喫茶の風習はみられ、人々は当然茶器を購入したであろう。茶器を数十個も購入するのであるから、役所・寺院・大家や飲食店などで大量に購入したのかもしれない。さらに、この茶器数十個を購入すると陸羽人形がもらえたとあり、大変興味深い。続文では、商人が茶の利益があがらないときにこの陸羽人形に水をそそいだとある。訳のうえでとりあえず“水”と訳したが、実はこの箇所の内容は、“市人沽茗不利，輒灌注之。”であって、陸羽人形にながしかを“灌注（そそぎかける）”しているのである。この習俗は、陸羽人形に商売の利益を祈願するものであるが、私は、この様子を頭に思い描くうちに中国でも日本でもなじみのある仏教行事である灌仏会（仏生会、浴仏会、竜華会、降誕会、日本で俗に花祭）を思い浮かべた。これは陰暦4月8日、釈尊の降誕を祝して誕生した釈尊の像に水をそそぎ洗い清める儀式であって、釈尊降誕のおり、龍が天から降りてきて香湯をそそぎ、降誕した釈尊は“天上天下唯我独尊”とさげんだという伝説によるという。また、宗教史の山折哲雄氏はこの灌仏会について“おそらくインドの寺院で参詣者

が水をあびて心身を清める風習があるのと、それは関係するであろう”⁸⁴といわれる。降誕の灌沐は、八相成道（釈迦が教化のため一生の間に示した8種の相）の一つであって、インドなどでは古石刻図（鹿野苑）も残る。灌仏会は西域でも盛んに行われ中国に入り、中国でも4世紀ころから行われ、ちょうど7・8世紀唐のころから行事として広く行われるようになった⁸⁵。上記の『唐国史補』にみえる、茶の利益があがらない時に商家のおこなった陸羽の像に水を注ぐという習俗も、当時盛んであった灌仏会と、像に水をそそぐという点で共通性があり、私は、当時、陸羽の像が商家のあいだで、茶神の様な信仰の対象になっていたのではないかとも考えている。

おわりに

最後に、各地で、茶が長年にわたって嗜好飲料として飲み続けられている理由について触れてみたい。現在、さまざまな栄養学的・薬学的観点からも、それに関する考察がなされているが、ここでは、茶が有史以来長い間飲み継がれている背景を述べている衛生学者・生命科学者の富田勲氏の見解をあげたい。

カフェインには、この他に弱い依存症（習慣性）をもたらす作用もありますから、それが習慣性を生み出します。お茶に限らず、コーヒーや、ココアなどが有史以来、長い間、飲み継がれている背景が、ここにあるといえます⁸⁶。

このように、氏は茶のカフェイン成分がもたらす習慣性を指摘するが、私は、この見解は、茶が長年にわたって嗜好飲料として飲み続けられている理由として、香りのもたらす癒し効果などととも、非常に説得力のあるものであると考える。

結局、茶の歴史をあらためて振り返れば、茶は各地で日常飲料として、また本草学的にも薬効のある飲料として用いられてきたことがわかる。ことに照葉樹林帯の地域では、茶の栽培が比較的容易で、身近に栽培できたこと⁸⁷などもその利用を促進した一因であったに違いない。すなわち、照葉樹林帯の地域に居住する人々がこの樹林帯のもつ自然の恵みを十分に享受・活用するなかにおいて、茶は次第に重宝され、これを日常の食生活において飲料や保健飲料として用いたり、あるいは儀式で用いたり、さらには飢饉の際の食材としても利用していったのであろう。また茶にはさきに述べた依存性・香りの効果、さらにはストレスを和らげる効果などもみられることから、嗜好品としても人々に好まれ、その

特性から照葉樹林帯以外の地域にも伝播し、今日に至るまで長きにわたって各地で飲用されてきたと考えられよう。

さて近年、茶の研究はかなりすすんできている。今後の研究の進展のためには、茶の関連史料のさらなる分析や各地の地方誌の整理・研究が必要であろうし、また茶に関連する民族学的フィールドワークの充実や、さらには栄養学・薬学的研究や植物学的研究ほか、幅広い研究分野からの成果にも期待が寄せられる。

注

- (1) 熊倉功夫ほか『中国茶文化大全』農山漁村文化協会，2001，p. 60.
- (2) 金子 務・山口裕文『照葉樹林文化の現代的展開』北海道大学図書刊行会，2001，p. 20.
- (3) 注(2)と同じ，p. 20.
- (4) 注(2)と同じ，p. 20.
- (5) 注(2)と同じ，p. 20.
- (6) 注(2)と同じ，p. 458-460.
- (7) 注(2)と同じ，p. 459.
- (8) 注(2)と同じ，p. v.
- (9) 注(2)と同じ，p. 465-466.
- (10) 宮脇 昭『NHK 知るを楽しむ この人この世界』日本放送出版協会，2005，p. 102.
- (11) 布目潮瀧『中国喫茶文化史』岩波書店，1995，p. 50.
- (12) 注(11)と同じ，p. 50-52.
- (13) 松下 智『茶の民族誌』雄山閣出版，1998年，p. 310.
- (14) 注(13)と同じ，p. 312-313.
- (15) アジアの食文化を研究する周達生氏は，“中国本土の茶の場合でも，原初の形態の茶は，最初は必ずしも漢族によるのではなく，むしろ少数民族がその発見をし，飲用または食用にしたのを，その後，漢族がそれを洗練し，各地に伝播させたのであった。”とする。（周達生『お茶の文化誌』福武書店，1987，p. 244.）
- (16) 清 巖可均『全漢文』巻42 中文出版社，1981，一部参照（著者訳）。
- (17) 注(11)と同じ，p. 70.
- (18) 明 喻政『茶書』甲本 萬曆壬子序巻刊本 内閣文庫蔵（布目潮瀧『中国茶書全集』上巻所収 汲古書院，p. 90，1987.），一部参照（著者訳）。
- (19) 田中美佐・大原良通『『封氏聞見記』及び『唐国史補』に見える陸羽資料の訳注と解説』『近畿大学短大論集』第40巻第1号 近畿大学短期大学部，2007，p. 6-7 参照。ただし，同稿では，陸羽人形にかけたものを，湯と訳した。
- (20) 唐 李肇『唐国史補』巻中 百部叢書集成。
- (21) 日本語版監修佐藤雅彦ほか 中国珪酸学会編『中国陶磁通史』，1991，p. 193.
- (22) 山折哲雄『仏教民俗学』講談社，1993，p. 34.
- (23) 『日本大百科全書』巻6 小学館，1985，p. 288 及び中村元『広説仏教語大辞典』上巻，2001，p. 245.
- (24) 富田 勲『お茶がもたらす健康・長寿』「淡交」12月号 淡交社，2002，p. 23.
- (25) 田中美佐『『喫茶養生記考』「青踏女子短期大学紀要」第21号，近畿大学青踏女子短期大学，1996，p. 112 参照。栄西が日本に茶を紹介した所以の一つもここにある。